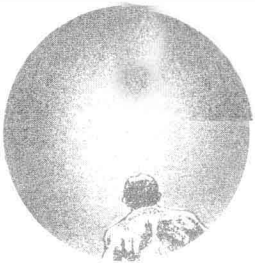
芥川龍之介の推理



土屋隆夫

講談社

芥川龍之介の推理
昭和46年10月24日　第1刷発行

定　価　460円
著　者　土屋隆夫（つちやたかお）
発行者　野間省一
発行所　講談社
〒112
東京都文京区音羽2―12―21
電話　東京（03）945-1111（大代表）
振替　東京3930
印刷　信毎書籍印刷株式会社
製本　有限会社中沢製本所
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします
©土屋隆夫　昭和46年
Printed in Japan

0093-300454-2253（0）（文2）

目次

芥川龍之介の推理……5
縄の証言……37
三幕の喜劇……85
夜の判決……117
沈黙協定……159
正当防衛……201
加えて、消した……235

裝幀　安彦勝博

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

芥川龍之介の推理

1

――レニエは、彼の短篇の中に、或る自殺者を描いている。この短篇の主人公は、何の為に自殺するかを、彼自身も知っていない。君は新聞の三面記事などに、生活難とか、病苦とか、或は精神的苦痛とか、いろいろの自殺の動機を発見するであろう。しかし僕の経験によれば、それは動機の全部ではない。のみならず、たいていは動機に至る道程を示しているだけである……。

江田信介（えだしんすけ）は、読みさしの芥川龍之介集から目を離すと、枕もとの灰皿を引きよせて煙草に火をつけた。

中学三年になる娘の美保子が、学校から借りてきたものだが、こういう書物は、江田の好みではない。

昔から、文学などには関心がなかった。小説というものは、女子供を楽しませるための作り話だと考えている。世界最高の文学作品を読んだところで、コソ泥一人を逮捕することもできないではないか。それが、S警察署の捜査主任、江田信介の持論であった。尤も、口に出して、人に語ったことはない。

娘の美保子は、なかなかの読書家だった。その点は、父親にも母親にも似ていない。似ていな

いことによって、母親は自慢し、江田はシブい顔をした。早熟な子ほど、小説を読みたがる。これも又、江田のひそかな持論であった。

だから、茶の間に置き忘れてあった芥川龍之介集を、江田が手にしたのは、全くの偶然であった。十五歳の娘は、どんな読物に興味を持っているのか。

パラパラとページを繰っているうちに、視線が、ふと一点にとまった。というより、活字のほうが、いきなり江田の目にとびこんできたのだ。それは〝自殺〟という二字であった。

この一ヵ月間、江田信介は、何十回となくその文字を目にして来た。それは、江田だけではない。S市全体が、いま、〝自殺〟という言葉に、異常な関心を持っているのだ。それには、理由があった。

S市では、この七月に入ってから、二十日たらずの間に、連続して三件の自殺事件が発生した。市の人口は、六万に満たない。もちろん、年間を通して、自殺ゼロという年はないが、短期間に、これだけの自殺者を出したこともなかった。

しかし、いま、市民の関心を集めているのは、自殺が、集中的に発生した、という現象についてではない。問題は、自殺者の年齢にあった。

木谷則夫。十八歳。市立工業高校三年生。これが、最初の自殺者であった。

つづいて、二番目の自殺者が出た。青木由子。市立第二中学校二年生。十五歳の少女である。

「二度あることは三度ある、か――」

検視に立会った刑事の一人が、現場で、ふとそんな言葉を呟いた。その翌日、三人目の自殺者が出た。

瀬川君江。市立中央小学校五年生。十一歳の女の子であった。遮断機のない踏切りに立ってい

たこの少女は、進行して来た電車に向って、とび込み自殺を企てたのだ。
「なんだって――十一歳の女の子？」
現場の近くにある交番勤務の若い巡査から、その報告を受けたとき、江田は電話機に向って怒鳴りつけた。
「おい、間違いじゃないのか。よく調べてみろ。踏切りを渡ろうとして、電車にはねられたんじゃないのか」
「間違いじゃありません」と、巡査は、断定するように言った。「たしかに自殺です。目撃者もあります。女の子は、走ってくる電車に向って、手を合わせてとび込んだと言っています」
「手を合わせて――？　それは、どういうことだ」
「つまり、合掌して、祈るような姿勢でとび込んだそうです。踏切りの反対側で、電車の通過するのを待っていたタクシーの乗客と運転手の証言です。ランドセルの上に、黄色い帽子と絵具箱が、キチンとのせてありました。この点からみても、自殺と考えられます」
巡査の言葉には、説得力があった。十一歳の少女だからといって、自殺を否定する根拠はない。もちろん、充分な調査も行われたが、結論は変らなかった。
相つぐ学童生徒の自殺は、県の教育界に衝撃を与えた。子供を持つ親たちにとって、それは、衝撃というよりも、恐怖に近い感情を与えた。三件とも、自殺の動機が判然としないからでもあった。新聞は「絶望か。逃避か。理由なき自殺の流行」と書きたて、「世代の断層が、両親や教師との対話を困難にして、その暗い亀裂の中に、若い生命が吸いこまれて行くのであろう」と解説している。活字の印象は、強烈であった。記者の文章は、警告的な意味で書かれていたが、人人は、それを予告と受取った。四人目の自殺者はだれか。それは、不吉な期待であった。しか

も、それが、わが子ではない、という保証はなかった。

警察の怠慢を責める投書も来た。これは見当違いであった。自殺は、犯罪ではない。取締る方法もなく、自殺予定者の捜査をする権限もないのだ。

新聞社への投書は、文字通り山積した。教師に対する不満や、その責任を追及する声が圧倒的に多かった。新聞社では、特集の紙面を組んで、学校側の意見や反論を並べた。連日の新聞に、〝自殺〟という文字が氾濫していた。江田信介の目にも、その活字は鮮やかに焼きつけられている。

彼が、芥川龍之介集の一冊を開いて、視点をその個所にとめたのは、それだけの理由があったのだ。

（美保子が、こんな小説を読んでいたのか）

標題は、「或旧友へ送る手記」となっている。江田信介が、その一冊を手にして寝室へ入ったのは、作品を鑑賞するためではなく、その内容を検討する必要を感じたからであった。

2

――自殺者は大抵レニエの描いたように、何の為に自殺するかを知らないであろう。それは、我々の行為するように、複雑な動機を含んでいる。が、少くとも、僕の場合は、唯ぼんやりした不安である。何か僕の将来に対する唯ぼんやりした不安である……。

そこまで読みすすんで、江田はちょっと眉をひそめた。この文章は、納得できない。人が、おのれの生命を断つためには、もっと明確で、させまった理由があるのではないか。〝ぼんやり

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

した不安〟を生み出した原因が問題なのだ。それらが、病苦や、生活難ではないか。つまり、自殺の動機を、〝ぼんやりした不安〟などと表現するのは、小説家特有の気どった心理描写にすぎない。理由は、もっと単純で、明快なのだ。

しかし、と江田は、もう一度、眉をひそめた。最初の自殺者、木谷則夫の場合は、その動機が少しも判明していないのだ。しかも、この少年は、二人の友人の目の前で、半ば冗談としか思えないような様子で、自殺を決行したのであった。

その日は日曜日で、高校の期末テストは、その前日に終っていた。二人の同級生が、則夫の自宅を訪問したのは、別に約束があったからではない。街で顔を合せた二人が、なんとなく則夫の部屋に上がりこんで来たのだ。

三人は、しばらく喋り合った。テストの結果とか、夏休みの計画といったようなことが話題の中心で、このときの会話には、格別の意味はない。日盛りの午後であった。往来に面した部屋には、ムンムンするような熱気がこもっていた。一時間ほどで、話がつきた。つきた、というより、喋り疲れたのだ。三人の間に、いっとき空虚な沈黙が来た。

「なにか面白いことはねえかなあ」

仰向けになって、ボンヤリと天井を眺めていた一人が、そう呟いたとき、則夫が起ち上がって言った。

「面白いものを見せてやろうか」

「うん、見せろよ」

「見る勇気があるか」

「勇気――？　面白いものを見るのに、勇気がいるのか」

「そうだ。お前には、初めての経験だろうからな」
もう一人の少年が、その言葉に誘われたように、体を起こした。
「おい、おれにも見せろよ」
「うん」と、則夫は頷いた。「結局は、他人にも見せるものだ。しかし、関係のないやつらにそれを最初に見せたくはなかった。やっぱり、お前たちとは、縁が深かったんだな。今日来てくれて、本当によかったよ」
あとで考えれば、それは自殺の宣言であったが、二人の同級生には、なんの予感もなかった。
則夫は「チン、それにシロちゃん」と二人の友人の綽名を呼んで、そこに坐ってくれ、と部屋の一隅を指さした。その声には、奇妙に威圧的な響きがあったから、二人は、示された場所に、なんとなく膝をそろえた。
則夫は、勉強机の前にある椅子に腰をおろして、引出しを開け、中から、褐色の小さな瓶をとり出した。彼は、フタをとると、それを二人の前に差出すようにして言った。
「これがなんだか分るか」
「さあ——」
二人は、首をかしげた。
「青酸カリの溶液だ。これだけで、百人の人間を、一瞬に殺すことができる」
「本ものか」と、一人が言った。
「本ものさ」と則夫は答えた。「おやじの工場から持って来たんだ」
則夫の父親は、市内で鍍金工場を経営していた。
「ただの水じゃねえのか」

別の一人が言った。則夫は、答えなかった。答えるかわりに、瓶を二、三回振ってみせた。
「生きていると」と、則夫は言った。「いろんなことがあった。これからもあるだろう。人生なんて、どうなってるのかな」
「おい、面白いものは、どうしたんだ」
一人が、いらいらしたように言った。
「もったいぶらずに、早く見せろよ」
則夫は、黙って頷いた。その顔には、ひきつれたような笑いが浮んでいた。
「じゃ、さよなら」と則夫は言った。その、唐突な言葉の意味を、二人の少年が理解したのは、それから十数秒の後であった。瓶の中身を一気にのみほした彼は、奇声を上げて椅子から転げ落ち、そのまま悶絶したのであった。
死因は、青酸カリによる中毒死であった。前後の状況から、自殺であることは間違いない。遺書はなかった。しかし、この少年が、七月七日を、自殺決行の日と決めていたことは、その後の調査で判明した。壁に貼られてあった七月のカレンダーで、七日の日曜日の個所が、黒い枠で囲まれていたからだ。その下には、ザ・ラスト・デーと英字で記されていた。最後の日——この少年にとって、七月七日にどんな意味があったのか。
自殺の動機は、現在も判明していない。父親の工場は、規模こそ小さいが、経営は順調だった。暮し向きも悪くはない。家族は、両親のほかに、二人の兄と一人の妹がいた。就職も、進学も、本人の希望にまかせていました、というのが、両親の言葉であった。成績は、クラスで五、六番といったところで、期末テストの結果も、かなり良好であった。校内で、問題を起したことは一度もない。

「ここへは、なんと書いたらいいでしょうかねえ」
死体見分調書の作成に当っていた古参刑事が、江田の前に書類を差出して訊ねた。調書には、死亡者という欄があり、死亡の原因と状況を記入しなければならない。更に、自殺者の場合は、その動機と方法を明記する必要があった。
「よわったな」と、江田は答えた。「動機なしだ。それとも不明とするか」
「そいつはまずいでしょう。ノイローゼとでもしておきますか」
「ノイローゼ？　しかし、本人には、そんな徴候はなかった、という――」
「いや、徴候がハッキリすれば、そいつはレッキとした精神病ですよ。要するに、その一歩手前の、モヤモヤした状態ですな」
刑事は、無責任な意見を述べたてた。
「しかし、本人をノイローゼに追いこんだ原因があるだろう。たとえば、進学だとか、就職問題といったような……」
「モヤモヤですからね。そういうハッキリした言葉で表現することはできない。自殺の本当の原因は、本人にだって分らないんじゃないですか」
「そんなことはないだろう。自殺というのは、自分の意志で決行するんだからね。本人には、ハッキリ判っている筈だ」
「昔」と、老刑事は、遠い目つきになって言った。「日光の華厳の滝へとびこんで死んだ青年がありましたね。樹を削って、書き残した遺書が有名になった――」
「厳頭の感か。人生は不可解だ、というような言葉のあったことはおぼえているが……」
「それですよ、人生が不可解だ、なんてことでも、人間は死ねるんです。それから、例の三原山

だ」

「昭和八年か、九年だったな」

「東京の女学生が、友人を自殺の立会人にして、自分は噴火口にとびこんだ。原因は、大自然の美に誘われて、ということになっている。その自殺に、こんどはあこがれるやつが出て、たしか三ヵ月間に六十何人。三原山は自殺の名所になった。人生が不可解でも、自然が美しくても、人間は死ねるんです。だから、この少年の場合は……」

「それだけの理由さえないんだ。正に、これは不可解だよ」

そのとき、江田はそう言ったが、老刑事は、空欄の部分へ、過度の勉学によるノイローゼ、という文字を記入していた。

あれは、正しかったろうか。もちろん、自殺の認定に誤りがなければ、動機はさして問題にならない。その後、少年の母親の実家で、数年前、長兄が精神病院で病死し、母親の妹にも、分裂症で入院中の男の子があることを、江田は知った。狂死した伯父と、狂った従兄の存在が、この少年に、同じような運命への終末を予想させたのか。

それは、いま、江田が目にしている文章の〝ぼんやりした不安〟に似ていないこともない。少年を死に追いやったものは、この作者と同じように、〝将来に対する唯ぼんやりした不安〟だったのか。

江田の目は、再び細かい活字に向けられていった。

3

——僕の第一に考えたことは、どうすれば苦しまずに死ぬかということだった。縊死は勿論こ

の目的に最も合する手段である。が、僕は僕自身の縊死している姿を想像し、贅沢にも美的嫌悪を感じた……。

なるほど、と江田信介は考えた。小説家らしい想像だが、この心理は分るような気がする。死んでからも美しくありたい、と願うのは人情であろう。紐の先端に、ダラリとぶら下がっている死体は、江田の知る限りでは、醜悪というよりもみじめであった。それが、この作家のいう、美的嫌悪であろう。

——美的嫌悪か。

江田は、ふと呟いたが、しかし、あの娘の場合は、と思考が第二の自殺事件の方向へ傾いていった。

青木由子。これが、その少女の名前だった。

自殺の届出があったのは、七月十九日の夕刻で、親類の結婚式に揃って列席していた両親が、帰宅して娘の死体を発見した。八畳の洋間は、天井に古風な装飾燈がとりつけてあり、その金具に、母親の腰紐を掛けて、娘は縊死をとげていた。すでに、体温はなく、硬質の陶器のような二本の素脚が、敷きつめた紅いカーペットの上に、垂直に伸びていた。

市立第二中学校二年生。十五歳の少女であった。

一学期の終業式を終って、友人と一緒に校門を出た。判明した少女の足どりと、自宅までの距離を考えると、家に戻ったのは二時ごろで、自殺は、それからほぼ一時間後に決行されたものと思われる。鑑識医は、死亡時刻を、三時前後と推定した。

遺書もなく、動機が不明であることは、前の高校生の場合と同様であった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.